

【考察】高感度CRPとGGTは、既に、糖尿病と心血管疾患の危険因子であることが指摘されており、今回の横断研究で、危険因子の集積にも深く関与しているため、メタボリック症候群の診断項目に加えるべきであろうと考えられた。他の項目については、今後の研究が必要であろうと考えられた。

II. テーマ演題

1 64列MDCTによる高精細画像データを用いた循環器領域での立体画像構築

長谷川奏恵・海津 元樹*・鈴木 啓介**

種田 宏司**・渡辺 弘***

新潟県厚生連佐渡総合病院内科

同 放射線画像診断科*

同 循環器内科**

新潟大学医歯学総合病院第二外科***

肺塞栓症、上腕動脈閉塞症、閉塞性動脈硬化症の症例における診断過程でMDCTを用いたことによる有用性を主に3D画像を提示し詳述する。

【肺塞栓症】

80歳代の女性。呼吸困難を主訴に来院した。心エコーで右心系負荷を認めMDCTで精査した。3D画像では、肺動脈壁を透亮化し内部に充填されている血栓の分布を評価しやすくし、MIP画像では、治療前後の血流の評価の比較に有用であった。同時に撮影した下肢静脈の画像で肺塞栓症の原因の90%ともいわれている下肢静脈血栓の存在を確認できた。

【上腕動脈閉塞症】

80歳代の男性。上肢の冷感としびれを主訴に来院した。脈拍の左右差を認め、血管評価をMDCTを用いて行った。閉塞部位の特定の他に、側副血行路の形成とその末梢側血管の描出が可能であった。本症例は、大動脈に石灰化が高度で左大腿動脈の閉塞もあり閉塞性動脈硬化症が原因と考えられた。

【閉塞性動脈硬化症】

70歳代の男性。下肢のつっぱり感と間歇性跛行

を主訴に来院した。両側のABIの低下を認め、MDCTを利用した。両側大腿中央部における動脈の閉塞部位の特定と側副血行路の形成および末梢側血管の描出に優れていた。

64列MDCT導入により、広範囲を高速かつ高分解能で撮影することが可能になり、画像診断の精度の向上に有用である。また、患者側においては従来の侵襲性の高いカテーテルを用いた血管造影検査ではなく、経静脈投与の撮影で有用な診断画像が得られるMDCTの役割は非常に大きい。今後、我々はMDCTの特性を理解した上で活用することにより、さらに臨床の場で有用な画像を提供できると考えている。

2 PCIの治療戦略にMDCTが有用であった2例

伊藤 正洋・広野 暁・小澤 拓也

太刀川 仁・小玉 誠・相澤 義房

新潟大学医歯学総合病院第一内科

2008年春より当院でも64列multidetector-row CT (MDCT) が導入された。薬剤溶出性ステント (DES) と同様に、虚血性心疾患の検査、治療戦略の決定において変化をもたらすと考えられる。経皮的冠動脈形成術 (PCI) において、MDCTの情報が有用であった症例について報告する。

〔症例1〕73歳、女性。労作時胸痛を主訴に近医を受診され、狭心症疑いで心臓カテーテル検査が行われた。冠動脈造影では右冠動脈 #1 で完全閉塞が疑われ、末梢へはブリッジ側副路でTIMI1 flowと考えられた。また、左冠動脈へのengageが不十分であり、その他の側副血行路の情報は得られなかった。当科に転院後、MDCTを行った。#1は、粗大な石灰化と非石灰化による限局性の高度狭窄があるが、末梢の描出は良好であり、非完全閉塞と考えられた。治療は右大腿動脈穿刺で、G.C.はAL 0.75 6F、G.W.はエクストリームで、M.C.としてinterpass Vを併用した。術前のMDCT所見を参考にG.W.を操作し、病変をクロス、血管本幹をとらえた。その後バルーンで前拡